

四月三十日

昨日私のワークシヨップの卒業生である大工の市根井君が椅子を作って持ってきてくれた。受賞のお祝にという事らしい。生憎屋上で生ゴミの仕事だったので話しが出来なかったが誠に嬉しい事だ。広島の本木君とも連絡を取らねばならないのだが、聖徳寺設計の進行状況が思わしくないので、正式な発注ができない。ドアハンドルから先ずやってもらおうかな。コロナ・グエルと勝負してやろう、てんだから大変なんだ。連休中に一度ベアシーに行けるか。まず無理だな。

十時前学校へ。行ってみて驚いた。全学休みになっているとの事。テヤンデー、俺はやるよ講議は、という訳で学部二年生の住宅論の第一講。受講者は四名の大学院生のみ。四〇分住宅論の概論をやった。何で大学はゴールデンウィークの中日を休みにするんだ。馬鹿ヤロー。学生の休みの事情なんか関係ネエだろう。午後雑用。学生相談数件。中国旅行のスライド現像仕上がる。もう随分昔の事のように想ってしまうから不思議だ。たった九日間の旅だったけれど場面が目まぐるしく変化していたな。佐藤健の気持の揺れのように。

十九時 インターネット社長若松氏来室。その後会食。この人の良さはどんな時にもめげない事だ。大いに気炎を上げていた。十二時前帰宅。

五月一日

中国旅行のおわりに気付いた事がある。

この世田谷村日記を何の為に記録し続けているのかを、少し考え直す必要がある。家族からは苦情が噴出している。アメリカに居る長女徳子からも彼女の友人達から自分の家の内情を知らされてビックリした、オヤジのアレを止めさせると、強い抗議が家内の許に寄せられている。次女、長男もそれに習って冷たい。家内は子供達に従って、更に輪をかけて冷たい。「アレ止めてよスグに」の連続だ。確かに彼等の言い分にも一理ある。この日記は何処で誰が読んでいるか解らない。想像を超えた読み方をしている人が居るだろう。例えば泥棒盗人を職業としていたりの人も居るかも知れぬ。変質者と呼ばれかねぬ人も居るにちがいない。妙なモノばかり売りがたがるセールスマンは意外に世間に多い。そんな人々にとって世田谷村日記はどんな風に読まれているだろうか、と考える。暗澹たる気持に落ち込まざるを得ない。しかしネガティブな要素は確かに在るには在るが、それにも増して私が日々を暮らしてゆくのに良い事もある。

私は自己分析するに、決して社会的な人間ではない。人間を選び好みする強いクセがある。だから友人は徹底的に友人であるし、関心の無い人間にはヒドク無関心である。酷薄と言われてもおかしくはない。時に私の無関心振りに気付かぬ慣れ慣れしさを振舞う人間は一気に嫌いになる。そして残念な事に嫌いな人間の方が圧倒的に多勢なのだ。要するに器が小さいのである。極度なピンポイントなのだ。文章や絵を作ったり、学問を突きつめたり職業であればそれで良い。むしろ望ましい。愛想のイイ一流の学者や作家に会ったためしがない。彼等や彼女達は皆そんなに謂はゆる堂々たる器、つまり受容力を持つ人達であるとも思えない。何

処かにトンガツたところがある筈なのだ。どこかに傷がある。

ところが私は建築家という職業を選んでしまった。マアこれはほぼ天職であった。他にやりようが無かつただろう。天プラ屋にもなれなかつたし、どんなタイプの会社員にもなれなかつた。まあそれはいたしかたなかつた。

建築家は面白い職業なんだけれども、一つだけ私にとっての難点がある。これは当然商いの一変種である。自分の能力の売り買いそのものだからだ。商いは社交に直結する。当然のことながら愛想が良く、人あたりが柔らかい人間の方が得だ。しかしながら、私は極めて愛想が悪く、人あたりもハードである。充二分に自覚している。これでは建築を作り続けるのは絶対に不利だ。何処かで私は若干の無理をして、つまり演技を打って社交家を振る舞う必要がある。つまり社交家としての私の舞台を何処かに構える必要がある。そこで私は実に多くの人々に素直に、時に愛想よく、サービスもして、多愛の無い冗談の一つ二つも言ってみせて、社交振りを演技しなければならぬ。

その舞台が私の場合はインターネットであつたらしいのだ。だからこの日記形式の演技満々振りは、人当たりが悪い、非社交家でパーティー嫌いの私の、それでもコミュニケーションしなきゃしょうがネエだろうの窮余の一策なのである。チョツとひねくれているけれどマア、そんな事ではあるらしい。

実物の私は年とともに益々人間嫌いで、狷介な人間になつてゆくだろう。近附かない方がよろしい。インターネット上の私にはそんな不自由さは無い。蝶のように舞い、蜂のように刺す、つもりなんである。何せバーチャルだからね。あるいはパーティー会場を流れるように動き廻り、過不足のないアイサツを万遍なく振りまき、時に女性にも品の良い何げなさを振舞える、そんな感じ

を作り上げようと、している最中なのである。つまりバーチャルと実生活の二重生活を試みている。

足かけ三年世田谷村日記は続いている。インターネット上に流して眼に見えて悪い事は起きていない。家族からの冷たい苦情だけである。勿論、大方のクライアント、そしてスタッフ、身近な学生達もこの日記は読んでいるだろう。私は十分に吟味した言葉の組み立てを使わなければならぬ立場に追い込まれているのである。

しかし、この状況は極めて現代的であるとも言えよう。私のスタッフも学生も直接、生身でコンタクトしてくる人間は居ない。私だってそんなエネルギーの消耗はもう出来ない。これ位のうすいコミュニケーションが一番今の時代には良いのだろう。誰も傷つかぬし、なにより平穏だ。しかし、傷つかず、痛みも無く、本物、スーパーな物を作り得る事があるのか。そりゃ、ないのだよ。それは断言できる。

建築づくりに関しては、やっぱり自分で全てに眼を光らせていかなければならない。スタッフと私の間の距離は一向に縮まらぬ益々、加速度的に開いていく一方だ。もちろんこの人達の成長を座して待つことはできない。これからの人材にもそれ程に期待はできないだろう。これは、キツパリあきらめるしかない。十三時三十分代々木GAギャラリー。二川幸夫と会う。何だか壮大なシリーズを考えているようで、アントニオ・ガウディの建築について秋までに書くように依頼される。現代建築は相変わらず世界的な不作状況が続いているらしい。レム・コールハースの評価を面白く聞いた。二川由夫が写真を撮り始めたようで、由夫はオヤジ程天性の感性を持たないけれど、それを知的に補って行く術を知っているから、上手くなると思う。二代目登場だろうか。

五月二日

朝星の子愛児園竣工検査。細かい事を言い出せばキリが無い。マア研究室の今の實力ではこんなものだろう。次に進む。

五月三日

九州宮本邸の図面チェック。A～Zまでの作り出すべきオリジナル細部をピックアップする。部分を独立させたドローイング形式をとれば無駄が無くなりやすいかも知れない。アトはゆるやかなモデュールのガイドラインを設定して、細部を充実させていけば良い。繰り返し必要とされる細部は値段も物体も次第に洗練されてゆくだろう。

九州宮本邸はオープン・テックハウスの#4であるが、日常生活に細部を組み込んでゆくのがもう一つのテーマになっている。構造は不明快であるという明快さを持っている。鉄の柱の林の中で暮らしている感じが良い。その林はまばらで、大きな森林ではない。連休に入ったが、地下では何人がか仕事をしている。

五月四日

聖徳寺現場へ。朝早く発ったのに大渋滞の只中に巻き込まれる。住職に会って、掘りすすめた凹部の底に入ってみて、東京に引き返す。折角の富士山麓なので、こちらの力が入っているのだけれど造園に関する知識が少な過ぎるので、その力みが空廻りしているのが自分で良く解る。疲れて夜は早く寝た。庭は独学でやるしかないな。

五月五日

朝から屋上菜園で野菜の手入れ。草花の面倒を見る。こうい

奴等は手入れするだけ育つからいい。人間はそうはいかないからね。汗ばむ位に植物と遊んで今日はゆっくりと休むつもり。

気温は29。カンカン照りの真夏の様な日である。こんな日は通りを行く人影もない。先程地下に人影があったような気がして降りてみたら誰も居なかった。明日は地下で仕事をしよう。誰も居ない休みの日は一番仕事ができる。

開放系技術世界。マイノリティーの建築。作家論。それぞれに進める。現代とは何か、まともにかかる。むづかしい。

五月六日

朝屋上菜園。野菜の世話はやり出したら際限が無いことが解ってきた。この際限の無さは機械を相手の仕事とはちヨツと違うな。川合健二が畑仕事に精を出していたのが少しばかり解るような気がしてきた。無限に近い複雑さを相手に手を動かし、身体を慣れさせてゆく細妙さの感得のようなものだろうか。人間の脳の複雑さ、突拍子のない動きも又、自然に対応する相対性から生まれてくる事が解るような気がしないでもない。不思議だなあ。午後地下で仕事する。静かだ。

日経連載コラム書く。「職人」これが自分の核の一つであろう。現代の職人もセルフビルドも要するにモノを作るのを楽しんでいる人たちを顕在化させようとしていた。ただ楽しみというのは今ではモリスのユートピア便りのようには現れはしない。もっと冷たい、酷薄とも考えられるシステムを故障させようという演技性の内から発生するのではないか。コンピューターに病原菌のごとくに入り込むハッカー達の情熱の源は何なのだろうか。